

Passions論への手がかり (6)

—アウグスティヌスにおける悪の問題—

Le Problème du mal chez saint Augustin

徳村 佑市

アウグスティヌス(354-430)は『自由意志論』の冒頭において、「どこからわれわれは悪をなすのであるか」という弟子の質問に答えて、「それこそは、まだ青年であったころの私を非常に苦しめた問題である。私はこの問題のためにつかれ果て、異端者たちの中に追いやられ、打ち倒されていたのである」と言っている。¹⁾ここで異端者たちというのはマニ教徒のことで、マニ教は当時キリスト教の一派とみなされ、アウグスティヌスは373年(19才)より384年(30才)にいたるまで、およそ11年間このマニ教の信者としてとどまったのである。²⁾『自由意志論』は、彼が過去の生活を清算し、マニ教をすてカトリックの信仰に復帰した388年(34才)のころ書きはじめられたものである。彼はその中で悪はまだ青年であったころの私を非常に苦しめた問題であったとのべているが、悪の問題は青年時代の彼を苦しめただけでは終らなかった。

『自由意志論』は三巻よりなり、その第一巻は34才のころ書きはじめられたものであるが、途中中断し、書きあげられたのは395年(42才)のことであるという一事を見ても、悪の問題が単に青年時代の彼を苦しめた問題であるばかりではなく、その問題の根は深く、『神の国』(426年、72才)の中でもとりあげられているのを見れば、ついには彼の終生の問題であったということができよう。³⁾

アウグスティヌスは370年ころカルタゴに遊学し、そこである女性と同棲することになる。これは彼の16才のときとも17才のときとも言われている。⁴⁾そしてこの女性との間に息子アデオダトウスをもうけている。この女性はおそらく

身分の賤しい人で、市民階級に属するアウグスティヌスとは正式に結婚できないような事情があったのであろう。そしてそれはカトリック教会に属する母モニカにとっても許容しえない関係であったようである。アウグスティヌスとこの女性との同棲関係は、彼がマニ教から離れる384年ころ、彼の30才のころまでつづくのである。山田晶氏は、アウグスティヌスがこの女性との同棲生活に入った時期(371年、17才)とマニ教に入信した時期(373年、19才)がほぼ一致し、彼がマニ教をはなれた時期(384年ころ、30才)が、この女性との関係を清算した時期と一致しているところから、彼がマニ教に入信したことで、この女性と同棲したこととの間には重要な関係があると指摘しておられる。⁵⁾そして先にも引用した『自由意志論』の冒頭の言葉、「それこそは、まだ青年であったころ私を非常に苦しめた問題である。私はこの問題のためにつかれ果て、異端者たちの中に追いやられ、打ち倒されていたのである」を想起するならば、彼にとって悪の問題は、この女性との同棲関係と関連するものであり、この問題の解決のために、マニ教に入信したと言っても過言ではないように思われる。

それではマニ教はこの悪の問題についてどう教えるのであろうか。マニ教は本質的に二元論である。それは霊と物質という二つの実体をたてる。前者は善、光、神であり、後者は悪、闇、悪霊である。現実の世界は、この善悪二元の闘争の場であって、霊肉二元からなる人間は霊であるかぎりにおいて神であるが、肉であるかぎりにおいては物質である。霊的な人間はこの世

においては、肉という物質のとりこにされているのであり、この物質の檻から人間を解放しにくるのが光の子であると説くのである。マニ教は旧約の神を否定するが、キリストを否定はしない。そして霊肉二元の対立を説いた使徒パウロを高く評価して、マニ教の使徒に加えているのである。⁶⁾ アウグスティヌスの青年時代におけるアフリカのカトリック教会は土俗化していて、このマニ教の方が知識階級には新鮮なものと思われ、異教としてではなく、キリスト教の一派としてうけとられていたようである。

このようにマニ教は善悪の二元をたて、人間の霊を善とし、その善が肉体という物質すなわち悪にとらわれていると説いているので、この悪から解放されるためには、肉の欲をはなれ、清浄な生活を送らねばならないとするのである。そしてその教団の組織としては、「聖者」と「聴聞者」の二つの階級にわけ、聖者は肉食妻帯をせず清浄な生活を送り、一般の信者はそのような生活を送ることは不可能であるので、肉食妻帯は許されるが、聖者に帰依し、その生活の資を供し、聖者の教えをきく聴聞者となるわけである。⁷⁾ このようなマニ教の戒律は一見きびしいように見えるが、その内実では聴聞者には比較的的自由が許されるので、当時同棲生活に入っていたアウグスティヌスにとっては、自分をうけいれてくれる新しい宗教のように思われたのであろう。

こうして彼は11年の長きにわたってマニ教の信者としてとどまるわけであるが、鋭敏な彼がマニ教の内包する矛盾に気づかないわけがなかった。前にものべた通り、マニ教は物質を悪と考える。そして人間の肉体も悪であるので、これから離れて清浄な生活を送ろうとするのであるが、人間が肉体をもつものである以上、その目標を完全に実行することは不可能であって、表面は清浄な生活を送りながらも、内面ではそれが偽善となることはさげえないことである。そうした偽善の聖者を自分の周囲に見るにつけ、アウグスティヌスはマニ教の聖者として令名の高いファウストウスの到来をアフリカで待ちこがれるのであるが、実際に会ってみて、ファウストウス

に失望し、マニ教から離れて行くことになるのは、彼の『告白』が語っている通りである。⁸⁾

こうした時期に彼はプロティノスを読み、悪とはマニ教の言うように物質ではなく、存在の欠除であることを理解するのである。山田晶氏は、アウグスティヌスが、この新プラトニズムの考えをうけいれた重要な動機として、アムブロシウスとの接触により、「教会のキリスト教」を再認識したことをあげておられる。⁹⁾ アウグスティヌスはもともとキリスト者であり、彼がマニ教に入信したのも、それをキリスト教の一派として考えていたからである。さきにものべた通り、マニ教は旧約の神を否定する。しかしアウグスティヌスはアムブロシウスとの接触によって、旧約聖書を文字通りに解するのではなく、霊的に解することを学んだのである。こうしてマニ教を信じていて、新約聖書の神はうけ入れるが、旧約聖書の神を否定してきた彼の前に、旧約と新約を貫いて存在する神の認識への道がひらかれたのである。それは世界を創造した唯一神としての神である。神は世界を創造して、それをはなはだ善きものと見なされた。それ故存在するものは皆善であり、したがって、マニ教が悪とする物質もまた善ということになる。マニ教のように物質を悪と考えるならば、それは神の力の及ばない世界を認めることになり、神の全能性を否定することになる。神は善きものであり、その神が創造された世界も善きものであるから、物質もまた良きものであるはずである。アムブロシウスとの接触によって「教会のキリスト教」の再認識に立ちもどっていたアウグスティヌスにとって、これは自然のなりゆきであり、こういう精神的土壌において、彼はプロティノスの言う悪とは「存在の欠除」であることを理解するのである。¹⁰⁾ 悪とは何であるかとの間に答えて、新プラトン派は、それは「存在の欠除」としての無であると答える。存在するものは全体としてすべて善なのであって、悪とはその全体を見失いながら、その一部に執着する人間の心に存在するものにすぎない。それ故新プラトン派は、人間の心を高め、一者との合一において自我の脱落するエクスタシスの

中に救いを見出しているのである。自我の脱落するエクスタシスにおいて一者と合一するということは、神と一致するほどに自我が透明となることであり、この観想の高みに立つならば、全世界はすべて善なのであって、悪とはこの高みに立つことが出来ないで、存在の一部に執着する人間の心に生じるものとしての無知にすぎない。それ故新プラトン派の救済はこの無知よりの救済であって、心を高めて神との合一に至るならば、そのときには、一者から流出したものとして、すべては善であり、自己もまた善なるものとして肯定されるに至るであろう。そしてこの観想の高みにたてば、悪は非有であり、悪なるものは存在しないのである。¹¹⁾これが新プラトン派の用意する救済であるが、アウグスティヌスはこの救済論にすなおについて行けたであろうか。彼はマニ教を離れて「教会のキリスト教」に復帰したとき、存在するものは善なる神によって作られたものであり、そのかぎりにおいてすべて善なるものであることを学んだ。しかし彼の生活の実感としてやはり悪は存在するのである。プロティノスにより悪は「存在の欠除」としての無であることを学び、それに共鳴したとしても、彼の実感として世界にはやはり悪は存在するのであり、その悪よりの救済が彼には問題となるのであった。それは新プラトン派の「無知」としての悪ではなく、アウグスティヌスにとっては「罪」としての悪であった。それは彼が罪の人であったからにはほかならない。¹²⁾我々はこれからアウグスティヌスにとって悪とはどのようなものであったかを見てゆかねばならない。

このようにしてアウグスティヌスは、「悪とは存在の欠除」であるとするプロティノスの考えによって、それまでおちいっていたマニ教の迷妄からときはなされるわけである。彼はもともとキリスト者であったので、善なる神が悪いものを作られるはずはなく、神によって作られたものはすべて善なるものではないかと考えて

いた。それがマニ教の迷妄の後、アムブロシウスやプロティノスとの接触によってはっきりしてくるのである。したがって存在するものがすべて善なるものとすれば、悪とは存在の欠除であるということになる。それは言いかえれば悪とは善の欠除であるということである。アウグスティヌスは、マニ教の教える物質は悪であるという考えに長く毒されていたので、この考えになかなか到達できなかったのである。その間の事情を彼は『告白』の中で次のようにのべている。

しかし私は、わずかながらもっていた敬虔の念から、善なる神が何か悪い本性のものを創造したなどということはどうしても信ずる気にはなれませんでしたから、二つのもののかたまりがあってお互いに対立し、どちらも無限であるが、悪いかたまりの方が狭く、善いかたまりの方が広いのだと考えてみました。そしてこの危険有害な思想の発端から、他のすべての冒瀆的な考えが生じてきたのです。¹³⁾彼はマニ教の物質は悪だとする考えに毒されていたので、このような迷妄からなかなかぬけ出せなかったのであるが、アムブロシウスの説教をきいて、「教会のキリスト教」に復帰し、徐々にこのような状態から脱してゆくのである。そして神は善い神だとすれば、その善い神が悪い存在を創造されるはずはない。したがって作られた存在はすべて善いものである。神は不動不変の善であるが、その神が作られた時間的、可滅的な存在であっても、それはそのかぎりにおいて善いものであって、実体 (substance) はすべて善であり、悪とはその偶有性 (accident) のようなものであると考えざるを得なかった。存在するものがすべて善だとすれば、善は悪なしにも存在することができるのであるが、悪は善なしには存在し得ないことになる。それを彼は「悪なるものは、つきつめてゆけば完全な無になってしまうような、善の欠除にほかならないことを当時の私は知らなかったのです¹⁴⁾」と言いあらわしているのである。

Dictionnaire de théologie catholique は le mal (悪) の項で、アウグスティヌスの考え

た悪の問題を説明するにあたって le mal physique と le mal moral にわけている。¹⁵⁾ R. Jolivet もこの分類にしたがっているので、¹⁶⁾ここではアウグスティヌスの考えた悪の問題を説明するにあたってはこの分類に従うことにする。le mal physique の physique という形容詞は「肉体的」という意味もあり、また「物質的」という意味もあるが、ここではこの両者を包含する広い意味にとっておこう。これに対し le mal moral の moral は「倫理的」「道徳的」という意味で、これはこれのみを意味するものと考えてもよいと思う。le mal physique は一言にして言えば、それは souffrance (苦しみ) であると言えよう。それは肉体からその完全性をうばうものとして肉体に影響を与えるものであり、また肉体に関して魂の欲するものと、実際に生じるものとの不一致によって魂を苦しめるものである。ここで魂という言葉を使ったが、それは肉体と結ばれているかぎりにおいて言われるのであって、これはあくまでも肉体に起ることについて言われるので le mal moral と区別すべきであろう。そしてこの le mal physique は肉体にのみとどまらず、肉体を通して物質界に広がるものと解すべきである。それは一言にして言えば死におわるような、肉体的構成物の解体を意味する。これに対し le mal moral というのは、正義が禁じ、それなしにもすませることを得ようとする意志の邪曲を意味する。それは言いかえれば péché (罪) であって、倫理的方正さにもとるような行為であり、道徳的規則に対し、自由な意志をもってこれを拒否しようとすることである。そしてそのかぎりにおいて、これは理性的存在にふさわしい善を欠除していることとなるのである。¹⁷⁾

アウグスティヌスは存在するものはすべて神によって作られたものであり、そのかぎりにおいて善であると考えた。存在は善であるというのは、マニ教を脱したアウグスティヌスの確信であって、存在するものはすべて善なるものである。もっともそれには段階があって、高次の善もあれば低次の善もある。そしてそれらは寄集って調和ある秩序をつくっているのであって、

その総体を見れば、それははなはだ善いものである。¹⁸⁾

このように個々の存在をとってみても、総体としての存在をとってみても、そこには神の秩序が保たれているのであって、この秩序をやぶるような悪なるものは存在しないのである。

しかしその部分をとってみると悪のように見えるものもある。それはある部分が他の部分に適合しないように見えるからであって、その部分も全体より見れば他の部分に適合しているものであり、そのかぎりにおいて神の定められた秩序を破るものではない。¹⁹⁾ たとえば蝮や蛆虫は好ましくないものと見えるかもしれないが、それは我々が自分にとっての効用によってそれを見、判断しているからで、蝮や蛆虫といえども、下位の部分に適合するかぎりにおいて善いものなのである。それらのものはそうした下位に適合するかぎりにおいて善なるものであって、総体としての神の作られた秩序に反するものではないのである。²⁰⁾ これは『告白』に見られる意見であるが、これと同じ意見は『神の国』の次のような個所に現れている。

〔被造界には〕火や冷たさや野獣やその他多くのそういう種類のものがあるが、それらは神の義しい罰に由来するこの死ぬべき肉体のもろさと弱さには耐えられず、それを害するものとみなされるからである。彼らはそれらのものが固有の領域と固有の本性においてどんな価値をもち、美しい秩序の中にどのように配置されているかを見ようとせず、またそれぞれの量りに応じて与えられた美によって、ちょうどすべての人の共有する国家共同体におけるように、宇宙全体に対してどれほど寄与しているかを見ようとしないのである。彼らはまた、わたしたちがそれらのものをふさわしく、かつ知識にかなった仕方で用いるならば、どれほどわたしたちにとって益となるかを見ようとはしない。たとえば適当でない仕方で用いる時は危険となる毒物でさえも、正しい仕方で用いれば治療に役立つ医薬に変わるのである。しかし反対に、食べ物や飲み物や光のような人を楽しませるものであっても、

分量や時を考えないで用いるならば有害であることが知られている。²¹⁾

他方「苦しみ」や「苦痛」であるが、それは感覚機能をもつ生物の本性に由来するものであって、これは感覚機能をもつ人間には不可避なことである。そして「苦しみ」や「苦痛」があるために、人はそれに対する治療を求めるわけであって、それを感じさせない腐敗よりも人間に役立つものである。その意味でもこれは善であると言うべきであって、「苦しみ」や「苦痛」は感覚的秩序の必然的結果であり、条件であって、これを悪であるとは考えるべきではないと思われる。²²⁾

このように見てくるならば、存在するもの自体は善いものであるから、物自体の中には悪はなく、唯一で真の悪はそれを悪用する人間の行為、すなわち道徳的悪、罪の中にあると言えよう。²³⁾ しかしこの罪の行為も、世界の秩序や人間の中にある秩序を破壊したり、かえたりすることはできない。この人間の本性の秩序に反した行為はその本性に反することにより、神の秩序にぶつかって、そこに混乱と無秩序を生みだすだけである。そして世界の混乱、無秩序も罪によってのみ悪となるのである。この無秩序、混乱は欠陥であり、存在の欠除であるので、それは神から出るのではなく、物を悪用する我々自身から出るものであり、さらに言えば我々自身の自由意志から出るものであると言えよう。物自体が悪なのではなく、それを悪用する我々自身の悪い意志、すなわち神の秩序に反しようとする罪そのもの以外には世界に悪は存在しないということになるのである。

アウグスティヌスは『自由意志論』の中で、自由意志は中間的善であると言っている。²⁴⁾ 美徳はそれをもって我々が方正な生活を送ることを可能とするものであるから、最大の善であり、あらゆる種類の肉体的、物体的美は、それなしにでも方正な生活を送ることが可能であるという見地から最小の善であり、自由意志はこの二つの善の中間におかれているものとして、それを善用も悪用もできるから、中間的善であると言われるのである。この自由意志も不滅な神に

よって可滅なものとして作られたかぎりでは善なるものであるが、それが悪用されることもあり、善用されることもある。悪用されるときには、それは自由意志の運動によってそうなのであり、善用されるときにはその運動は神のめぐみの下にあるのである。

人間はこの自由意志をもって神に固着するときに至福なものとなるのであるが、自分が作られた神をはなれて被造物へおもむくとき悲惨なものとなる。²⁵⁾ 自由意志でもって神に固着することが人間にとって善なのであり、無から作られたことにより、より存在の希薄なものへと向うときには、その運動そのものが悪となるのである。この点についてアウグスティヌスは『告白』の中で次のようにのべている。

自然の世界に実在しているもので、あなた(神)が存在すると同じしかたで存在してはいないが、それにしても存在しているものはすべて、あなたがお造りになったものである。あなたによらないのは「あらざるもの」(無)のみ。真に存在するあなたからはなれて、より希薄な存在者へむかう意志の動きもあなたによるものではない。このような動きはあやまちであり、罪であるから。しかし何人の罪もあなたをそこなわず、あなたの統治の秩序をその最高の領域においても最低の領域においてもかきみだすことがない。²⁶⁾

このように人間は自由意志をもって神に向い、神に固着するとき善なるものとなるのであり、それに反して被造物へむかい、被造物にとらわれるとき悪しきものとなるのである。人間の自由意志は神によって与えられたものとして善なるものであるが、それが創造主の方へむかず、転倒したかたちで被造物にむかい、それに固着するとき罪が生じ、悪なるものとなるのである。自由意志そのものは悪なるものではなく、それが低次の被造物へ向って低落し、それに固着して、人間の本性である方正さを損うときに、そこに悪が生じるのである。アウグスティヌスは次のように言っている。

それゆえ魂はあなた(神)のもとにかえるときはじめて、純粹透明なすがたで見出される

ものを、あなたにそむき、あなたの外にもとめるとき、姦淫の罪を犯します。あなたから遠ざかり、あなたにそむいてたかぶる者は、すべて転倒したかたちであなたを模倣しています。にもかかわらず、そのようなしかたにせよ、あなたを模倣しながら、あなたが万物の創造主にましまし、したがって何もあなたから完全にはなれさせることはできないことを、示しているのです。²⁷⁾

アウグスティヌスは本来人間が向うべき造物主、その中で人間が自分自身を実現することが可能となる神を離れ、被造物へと向う動きを「転倒した意志」と呼んでいる。神をはなれて被造物へ向う動きを「情欲」と呼ぶことは前にも見たところであるが、²⁸⁾「この転倒した意志から情欲が生じ、情欲に仕えているうちに習慣ができ、習慣にさからわずにいるうちに、それは必然となってしまったのです。これらのものは、いわば小さな輪のように互いにつながりあって一だから鎖と呼んだのです—私をとらえ拘束してつらい奴隷の状態にしてしまいました」と彼は『告白』の中でのべている。²⁹⁾ 神に固着せず、被造物に固着すること、それが「転倒した意志」でありまた「情欲」でもある。そして罪はこの「転倒した意志」の運動、すなわち「情欲」の中に宿るのである。

このように唯一の悪である罪とは転倒した意志、すなわち情欲なのであるが、アウグスティヌスは『神の国』で、その悪い意志を生むものは何かと問うて、そのようなものはないと答えている。たしかに悪いわざを生むものは悪い意志なのであるが、その悪い意志を生むものは何もないのである。³⁰⁾ この点について Jolivet はアウグスティヌスの言葉を引用しつつ次のようにのべている。

無から作られたことと理性、³¹⁾ かようなものが悪い意志を可能とする条件である。もっと先を探さねばならないか、聖アウグスティヌスはそれを無用と考える。朽ちるものへのこの運動が魂の運動であり、意志の運動であり、したがって罪あるものとみとめられるのであるから、探究をもつと遠くへおしすすめ

ることが何の役に立つだろうか、と彼は言う。

「すべての悪の根を探すのなら、それは情欲 cupidité であるという使徒の言葉に耳を傾けるがよい。私は根のそのまた根を探すことはできない。ところでその根が情欲でない他の悪があるとすれば、すべての悪の根は情欲ではないことになる。しかし情欲がすべての悪の根であることが正しいとすれば、それを越えて何らかの悪を探すことは無益である。」³²⁾

たしかに神はその無償の贈与によって、人間性を高め、罪をおかさないように作ることもできたであろう。そうすれば人間が歴史において見てきたすべての悪は犯さずにすんだかもしれない。しかし神はそのようなものとして人間を作られなかった。神は人間を作られたとき、自由意志を与えられ、それによって悪へおもむくこともできるが、善へおもむくこともできるように造られた。意志が神である不変不動の善に固着するときには人間は善きものとなり、自己の本性を実現することが可能となるのであるが、可変的低次の善へおもむくとき、それは転倒した意志となり、情欲となって、悪の宿るところとなるのである。それ故神は人間に自己の本性を実現するために必要な手段をすべて与えられ、かようなものとして人間を作られたのであって、人間は神の思寵によってこれを実現することが可能なのである。人間が転倒した意志によって悪へ赴くからと言って、悪をする可能性がないように作られなかったことを嘆いてもはじまらないのである。そのような嘆きや問いを前にして、神は「私はそれを欲しなかったからである」と答えられるだけであろう。そこに神秘が宿るのである。人間の理性には越えがたい一線があるのであって、その前で人間の理性は頭を下げるほかはない。そして使徒パウロとともに「ああ、神の富と上知と知識の深さよ」（ローマ人への手紙11. 33）となえるほかはないのである。³³⁾ あるいはまた使徒とともに、粘土で作られた壺が何故このように作られたのであるかを、陶工に問うであろうか（ローマ人への手紙9. 20-21）とも言うべきであろう。

我々はこれまで悪の問題をとりあげ、悪をle

mal physique と le mal moral にわけて考察してきたわけである。そして le mal physique については、我々にとって悪と見えるものも、下位のものと同様であるかぎりにおいて善であり、それは神の秩序をやぶるものではなく、そのかぎりにおいて le mal physique は悪ではないことを見てきたわけである。そして唯一の悪は le mal moral すなわち罪であることを論じてきたわけであるが、この罪とて神の秩序を破るものであろうか。この点に関して Jolivet は次のようにのべている。

絶対にたしかなことは、神のわざは挫折を知らないということである。神は悪をも罪人をも作らない。しかしそれらを予見しながら、創造の全体的善の中に位置づけるのである。

「悪い人間が善い被造物を悪用するように、善き創造者は悪しき人間を善用する。画家は絵が美しくなるために、どこに黒を置かねばならないか知っている。そして神は創造が秩序を保つために、どこに罪人を置くべきか知らないであらうか。」³⁴⁾

このように神の秩序の中においては、悪しきものは下位に適合し、善いものは上位に適合し、全体として秩序は保たれるのである。これは le mal physique の場合と同様であって、le mal moral においても、罪人はその下位に適合することによって、全体としての神の秩序は保たれるのである。するとこのような神の秩序において、罪人は下位の部分に適合することによって全体の秩序を破らなるとすれば、罪人はそこに安住することによって、善へとたちかえる必要はないのではないかと疑問も生じるわけであるが、アウグスティヌスはこのような問いに対して否と答える。というのは罪人が全体の秩序の中の下位に適合するのは、罪に対する義しい罰としてそうなるのであって、善い者は上位に適合することによってその報いを得、悪いものはその罰として下位に適合するのであるから、悪しきものがその下位に適合するからと言って、そこに安住するという結論は出てこないなのであって、罪人は自分に適合する罰の中で苦しみ、自分の本性を破る悪の中で、創造主をあおぎ見

ることによって、善へとあこがれるようになるのである。このようにして神の秩序は保たれ、いかなる罪もそれをそこなうことはありえないのである。

アウグスティヌスは『自由意志論』の第一巻で、人間がおかれている秩序の問題にふれ、次のように言っている。人間には植物や動物と共通する要素があるとし、身体の栄養をとり、大きくなり、生殖し、強くなる点では、樹木と共通する要素をもち、また見たり、聞いたり、嗅覚や味覚や触覚で物体を感じとる点では動物と共通の要素をもつと言っているし、力や活力や手足の丈夫さ、身体の敏捷さについて、人間は動物と同等あるいはそれ以下、あるいはそれ以上の能力をもつとしている。また人間には遊戯や笑いのように、動物に見られない点もあり、さらにそれ以上に、賞賛や栄光への好み、支配の欲望など、人間独自の要素のあることにも注目している。そしてアウグスティヌスはこの賞賛や栄光への好み、支配への欲望などを passions (情念) と呼び、désirs (欲望) とも呼ぶのであるが、これらの irrationnel (非合理的) な要素が理性、知性、精神の支配下に入るときには、人間には完全な秩序が支配すると言っている。ここでは理性という語のほかには知性 (intelligence), 精神 (esprit) という言葉が使われているが、この二つの名称は聖書中に現れるので、これを使うと言っている。³⁵⁾

また『自由意志論』の第一巻の他の部分で、「おそれ」「欲望」「苦悩」「無益ないつわりの喜び」「愛していたものを失う苦しみ」「持っていなかったものを手に入れようとするいらだち」「受けた侮辱の焼けるような痛み」「復讐への熱望」、そのほか「貪欲」「淫乱」「野心」「傲慢」「嫉み」「無為」「強情」「屈辱」などを列挙しているが、これらの要素が理性の支配下におかれるとき、人間には秩序が支配するのだと言っている。³⁶⁾

この『自由意志論』の第一巻は、彼がマニ教

を清算して、「教会のキリスト教」に復帰した若いころに書かれたものであるが、彼の晩年に書かれた『神の国』の中では、アウグスティヌスは人間の情念として、「欲望」「喜び」「恐れ」「悲しみ」の4つをあげ、それについて次のように解説している。

これらの動き（情念）を生む重要な要素は人間の意志の性格である。というのも、意志が転倒しているならば、動きも転倒し、意志が正しいならば動きは批難に値しないだけでなく、賞賛すべきものだからである。たしかに意志はあらゆる動きの中に見られる。いやむしろ、あらゆる動きは意志の働きにほかならない。なぜなら欲望や喜びは、わたしたちが欲するものに同意する意志の働きにほかならないからである。また恐れや悲しみは、わたしたちの欲しないものをこばむ意志の働きにほかならない。わたしたちが欲するものを求め、それに同意することが欲望と呼ばれ、わたしたちが欲するものを享受し、それに同意することが喜びと呼ばれる。同様に、わたしたちに起るのを欲しないものに同意しない場合、そのような意志の働きが恐れと呼ばれ、わたしたちが欲していないにもかかわらず起きるものに同意しない場合、そのような意志の働きが悲しみと呼ばれる。そして一般にわたしたちが求めたり避けたりするものの種々の性質に応じて人の意志が引きつけられたり反発したりするように、意志の働きは種々の傾向性の中で変化したり方向を変えたりするのである。³⁷⁾

このようにアウグスティヌスは善い意志が善い情念を生み、転倒した意志が悪い情念を生むと言っているのである。さらに彼は善い意志の動きは善い情念そのものであり、転倒した意志の動きは悪い情念そのものであるとさえ言っている。前にも見たとおり、善い意志とは神に固着することであり、転倒した意志とは本来向うべき神をはなれて被造物に固着することである。ところで転倒した意志とはすなわちcupidité（情欲）であるので、³⁸⁾ここで情念と情欲の関係がはっきりしてくるわけである。転倒した意志

の動きが悪い情念であるとするれば、転倒した意志そのものはcupiditéと呼ばれるので、情念とは情欲の別名であり、それは意志を媒介として結びつけられていることが明らかとなる。我々は、cupiditéは一名concupiscenceとも呼ばれ、それは人間の根底にひそむものの神学的表現であり、情念とはその心理的な面での呼称であるのを「passions論への手がかり」（2）で見たのであるが、³⁹⁾その内容としては、転倒した意志cupidité一名concupiscenceが悪い情念を生むというアウグスティヌスの説明によって、情欲と情念は意志を媒介として結びつけられることをここに見るのである。

アウグスティヌスはまた次のようにも言っている。

けれども、クピディタスあるいはコンクピステンティアと言う場合、それが何を求めるかを示さないならば、悪い意味でだけ言われるというのが一般の用法である。⁴⁰⁾

このようにcupiditéあるいはconcupiscenceは悪い意味で用いられることが多いのであるが、アウグスティヌスも言う通り、意志が善いならば情念は善いのであるから、意志が正しく神に固着しているならば、善い情念が人間を支配することになる。そしてその場合、cupiditéあるいはconcupiscenceに善いものとしての意味をあたえることができることは、「情念論への手がかり」（2）で見てきた通りである。cupiditéすなわちconcupiscenceは悪い意味で用いられることが多いのであるが、善い意志が神の思寵によって得られ、それが神の方へ向くとき、情念と情欲が善いものとなり、あるべき状態をとりうることを仮定しても良いと思われる。

このcupiditéあるいはconcupiscenceは通常三つに分けられることは「passions論への手がかり」（2）で示している通りである。それはヨハネの第一の手紙2・15-16にもとずいて発展されたもので、アウグスティヌスは『告白』の中で三つのconcupiscenceについて詳述している。それは「肉の欲」（concupiscence de la chair）、「目の欲」（concupiscence des yeux）、「生活のおごり」（orgueil de la vie）

であって、このうち「目の欲」はアウグスティヌスでは知的好奇心を示すものであるが、トマス・アクィナスでは金銭や美しい服に対する欲求をあらわすものとしてとらえられている。また第三の情欲である「生活のおごり」は「富のほこり」(orgueil de la richesse)と訳されることもある。

以上アウグスティヌスにおける悪の問題を見てきたのであるが、彼においては唯一の悪は、péché (罪)であり、罪の根元は転倒した意志、すなわちcupiditéであることは以上で明かとなったと思う。善の欠如としての悪は罪においては人間の本性の秩序への破損、欠陥としてとらえられるわけであるが、罪が神の秩序の中では下位に適合し、黒色が絵をひきたてるように用いられるからと言って、人間がそこに安住しても良いということにはならない。罪は世界の秩序を破りえないとしても、前にも見たとおり、それは罪への義しい罰としてそこにおかれているのであって、人間が善に向い、神へと固着することによって、本来の秩序に服すべきことは、以上見てきたことの当然の帰結であると言えよう。

注

アウグスティヌスの『告白』については、山田晶訳『告白』(世界の名著)に、また『神の国』については「アウグスティヌス著作集」(教文館)所載のものによった。またLe libre arbitre (De libero arbitrio)についてはOeuvres de saint Augustin 6 (Desclée de Brouwer)のフランス語訳によった。

1. 山田晶, 『アウグスティヌスの根本問題』 p. 227
2. ibid. 山田晶氏はマニ教信奉期間を11年としておられるが, Dictionnaire de théologie catholiqueは373年より382年の9年とし, New Catholic Encyclopediaはタガステで1年, カルタゴで8年の計9年としている。
3. ibid. p. 228
4. 山田晶氏著『アウグスティヌスの根本問題』では, 371年(17才)とし, 同氏訳の『告白』(世界の名著)の巻末の年表では, 370年(16才)としている。Dictionnaire de théologie catholiqueでは, アウグスティヌスがカルタゴに着いたのは370年の終りごろとな

っており, 息子アデオダトウスが生まれたのは372年となっている。この息子の生れた年では前記の年表と一致している。

5. 山田晶, 『アウグスティヌスの根本問題』 p. 235
6. ibid., p. 233
7. ibid., p. 234
8. 『告白』第5巻第6章
9. 山田晶, 『アウグスティヌスの根本問題』 p. 243
10. ibid., p. 243—p. 244
11. ibid., p. 248—p. 250
12. ibid., p. 255
13. 『告白』第5巻第10章第20節
14. ibid., 第3巻第7章第12節
15. Dictionnaire de théologie catholique Tome 9, 2 partie, col. 1693
16. R. Jolivet, Le Problème du mal d'après saint Augustin p. 39
17. ibid., p. 36
18. 『告白』第7巻第12章第18節
19. ibid., 第7巻第13章第19節
20. ibid., 第7巻第16章第22節
21. 『神の国』第11巻第22章
22. R. Jolivet, Le Problème du mal d'après saint Augustin p. 49—p. 50
23. ibid., p. 63—p. 64
24. Le libre arbitre II, 19, 50
25. 『神の国』第12巻第1章第2節
26. 『告白』第12巻第11章第11節
27. ibid., 第2巻第6章第14節
28. Passions 論への手がかり(2) 金沢美術工芸大学学報22号
29. 『告白』第8巻第5章第10節
30. 『神の国』第12巻第6章
31. ここで理性とあるのは, すべての感覚的機能をそなえた生物の中で, 人間だけが罪をおかす。それは人間が理性をそなえているからだという意味に用いられているのである。(R. Jolivet, Le Problème du mal d'après saint Augustin p. 87)
32. R. Jolivet, Le Problème du mal d'après saint Augustin p. 88—p. 89
33. ibid., p. 106—p. 107
34. ibid., p. 109—p. 110
35. Le libre arbitre I. 7. 18
36. ibid., I. 11, 22
37. 『神の国』第14巻第6章 ここではアウグスティヌスは「欲望」「喜び」「恐れ」「悲しみ」の4つの情

念しかあげていないが、『神の国』第14巻第7章では次のように言っている。「それゆえ、正しい意志は善い愛^{アモル}であり、転倒した意志は悪い愛^{アモル}である。このアモルは愛の対象を欲し所有することであり、他方クピディタスはそれを所有しかつ享受して喜ぶことである。愛に反するものを避けることが恐れであり、その恐れが現実^{アモル}に起るときに感じられるのが悲しみである。これらの情念は愛が悪ければ悪く、善ければ善い」これによってみればアウグスティヌスは諸情念の根底にあ

るのは愛であると考えていると言ってもよいと思われる。

38. Le libre arbitre III. 17. 48

39. Passions 論への手がかり(2) 金沢美術工芸大学
学報第22号

40. 『神の国』第14巻第7章

[昭和58年7月30日受理]